

大台ヶ原の歴史

（１）大台ヶ原の歴史

１）江戸期までの歴史

台高山脈とともに紀伊半島の骨格をなす大峰山脈が霊場として千年以上前から信仰登山者を集めてきたのに対し、明治以前の大台ヶ原に関しては薬草の採取や探査などの限られた登山記録しかないが、紀州側山麓の人々は、かなり昔から、木材や薬の材料を求め、また猟師や炭焼きとして、西大台深くにまで入山していたと考えられる。

大台ヶ原への入山の最も古い記録としては、宝永5（1708）年の文書「北山由緒書」に、慶長11（1606）年に天台宗の僧、丹誠上人が^{たんせいしょうにん}入山したことが記されている。丹誠上人は、上北山村と川上村をつなぐ^{おぼみね}伯母峰道（古道・東熊野街道）の改修に尽力した人としても知られる。

また、享保年間（1716～1735年）には、幕府の命により、採薬使が度々大台ヶ原に入山したことが記録されている。また、寛政元（1789）年頃、紀州の南画家、野呂介石が、^{のろかいせき}従者、案内人など10名を引き連れて入山し、紀行録「^{だいざんほれきりやつき}臺山跡歴略記」を記している。

天保5（1834）年には、紀州藩の漢学者、仁井田長群、国学者で歌人の^{かのうもろひら}加納諸平が、「紀伊続風土記」の編纂に当たって、地勢調査のために入山し、その記録として「登大台山記」を記しており、木材などを求める人が入山し、小屋掛けしていたことが記されている。また、同じ天保年間（1830～1843年）には、紀州の藩医・本草学者の^{みなもとともあり}源 伴存（^{くろだすいざん}畔田翠山）が入山して、「吉野郡名山図誌」を著しており、その中の「大台山記」で大台ヶ原を詳しく紹介している。「大台山記」には、大台ヶ原に人が入っていることを示す証拠として、小屋や朽ち果てた^{そまごや}桧小屋跡があることや、尾鷲方面からの鳥もち作りの人々の入山についても記されている。

２）明治以降の歴史

○明治以降の開拓・探索

明治2（1869）年、京都宇治の興聖寺が、西大台地区の約300㎡を伐採し開拓を試みたが、作物が育たず1年余りで放棄された。この土地が現在の開拓であるといわれる。明治7（1874）年には、修験者の^{はやしじつかが}林 実利が大台ヶ原に入り、牛石ヶ原（推定：元木谷源頭）に小庵を結んで修行を行ったと言われている。

明治18（1885）年には、北海道の探検で知られる^{まつうらたけしろう}松浦武四郎が、大台ヶ原への最初の登山を行った。松浦武四郎は、明治19年、20年にも大台ヶ原に入っており、計3回の登山を行っている。現在、西大台には、遺言に従い、松浦武四郎の分骨碑が建てられている。

明治24（1891）年には、大台教会の開祖、^{ふるかわかさむ}古川 嵩が大台ヶ原開山を目指して入山した。明治26（1893）年より、大台教会の建設に着手し、明治32（1899）年に完成した。古川嵩は、牛石ヶ原にある神武天皇像の建立や八木測候所の依頼を受けた気象観測、登山者の宿泊の世話などにも尽力し、大台ヶ原開山の中心となった。古川嵩の墓所は、苔探勝路沿いの小高い丘の上に見ることができる。

○製紙会社による開発と自然保護の始まり

開山後、^{どくろしやうざぶろう}土倉 庄三郎による^{いかたば}筏場登山道の整備などもあり、登山家や研究者、信仰登山の人が入山するようになったが、一般的な登山の対象とはならなかった。明治28（1895）年には、植物学者の白井光太郎が植物調査を行っている。

一方、明治に入り、紙の需要が増大したことから、各製紙会社は針葉樹を求めて日本各地の調査を行った。この当時、大台ヶ原は^{おおあざことち}大字小椋と^{おおあざにしはら}大字西原が所有する部落有林であった。四日市製紙は、明治40（1907）年に大台ヶ原に入っで見積もりを行い、明治43年に大台ヶ原を買収した。四日市製紙は、大台林業株式会社を設立し、運材設備などを整え、大正6（1917）年から本格的な搬出出荷を開始した。

こうした動きに対し、大正5（1916）年、吉野山保勝会主催の講演会が行われ、その中で、白井光太郎は大台ヶ原の自然の重要性を訴える講演を行い、大台ヶ原に対する関心を高める契機となった。また、翌大正6（1917）年には、吉野郡の主催により、白井光太郎、林学者の^{かわせぜんたろう}川瀬善太郎、史蹟名勝天然記念物保存協会会長の^{とくがわよりみち}徳川頼倫らの参加により、大台ヶ原への大規模な登山が行われ、山上で講演会が行われている。また、吉野郡役所の産業技手であった^{きしだひでお}岸田日出男は、吉野群山の調査と紹介・宣伝に尽力した。

このように大台ヶ原の自然の重要性と保護の必要性に対する認識が高まる中、吉野郡役場が、奈良県に対してトウヒ林伐採中止を要請しており、大正7（1918）年には大台ヶ原の一部が保安林に編入された。なお、大正10（1921）年を過ぎると、木材不況となり、大正14（1925）年、四日市製紙による事業は中止された。

この時期の伐採の痕跡として、東大台の各所で、ヒノキなどの切株を見ることができる。また、東大台のシオカラ谷付近や西大台では、木材搬出路の痕跡が見られる。



大正期の大台ヶ原

出典：岡本勇治著「世界乃名山大台ヶ原山」（大正12年）



木材搬出の状況

出典：「新富士製紙百年史」（平成2年）

○国立公園指定と利用者の増加＜戦前期＞

昭和6（1931）年4月に国立公園法が制定され、地元では岸田日出男を中心とした吉野熊野における国立公園指定の運動が進められ、昭和11（1936）年2月、大台ヶ原を含む吉野熊野地区が国立公園に指定された。昭和15（1940）年には吉野熊野国立公園の保護、利用の計画を定めた公園計画が決定し、その中で大台ヶ原地区が特別地域に指定された。また、施設設備の面では、昭和15（1940）年に大杉谷探勝路が開設され、昭和16（1941）年には関西急行（現近鉄）青年寮が開設されるなどして、増加する利用者を受け入れるための整備が進められた。